



2026年5月16日（土）
山形大学人文社会科学部棟301教室
公開シンポジウム

古代アンデスとリャマ 可能性と多様性

12：00 受付開始

12：30 - 12：40 趣旨説明

第I部 考古学からみたリャマ

12：40 - 13：10

「神殿社会の展開とラクダ科動物

考古学データから見るヒト・モノ・動物の移動」

山本睦（山形大学）・松本雄一（国立民族学博物館）・鶴見英成（放送大学）

13：10 - 13：40

「形成期アンデス社会とリャマ牧畜：動物考古学的視点から」

鶴澤和宏（至誠館大学）

第II部 最新の科学分析からみるリャマ

14：00 - 14：30

「同位体分析による形成期ラクダ科動物の飼育と利用」

瀧上舞（国立科学博物館）・大西雄二（総合地球環境学研究所）

14：30 - 14：45

「コラーゲンの質量分析による遺跡出土ラクダ科動物の探索」

江田真毅（北海道大学）

14：45 - 15：00

「古代DNA分析が提供する形成期リャマの情報」

神澤秀明（国立科学博物館）

第III部 対話と議論

15：15 - 16：00

「対談：リャマの環境適応性—アンデスと日本の飼育比較—」

若林大我（法政大学）

山中隼輝様・ケル福田沙羅（ネオパークオキナワ）

16：00 - 16：30 コメント

関雄二（国立民族学博物館）

渡部森哉（南山大学）

本郷一美（総合研究大学院大学）

16：30 - 17：30 総合討論

本シンポジウムはアンデス原産のラクダ科動物、リャマを切り口に、古代アンデス文明の形成および展開を解明していこうとするプロジェクトの成果を、専門家および一般に広く伝える目的で開催します。3年前に開催した公開シンポジウム「古代アンデスとリャマ：文明形成をめぐる新視点」から3年間の調査の進捗を報告いたします。

アンデス文明が開いた地域には、海岸砂漠から氷河をいただく高地、アマゾンの熱帯雨林といった多様な生態環境が存在します。そのなかで、リャマは、各地で生産される資源を運搬する荷駄獣として、古代社会の展開に重要な役割を果たしたと考えられてきました。しかし、現在、リャマを飼育している牧民は、限られた高地に暮らしており、古代において、リャマを飼育した人々の姿を見定めるのは非常に困難な課題となっています。近年の調査では北高地ではトウモロコシ農耕と組み合わせさせた低地でのラクダ科動物の飼育と利用が進んでいたことが明らかになってきています。一方で、海岸や南部高地や熱帯上部では形成期のラクダ科動物の存在は確認できるものの、農耕と連携した飼育の広がりはありません。それらの情報から、形成期社会でのラクダ科動物利用は地域によって様相を異にしていたことが予想され、従来指摘されていた「偏在する資源利用のための荷駄獣」というイメージだけでは捉えきれない多様な役割を担っていたと考えられます。アンデス文明における社会動態を論じる際の基礎情報の一つとしてリャマを中心としたラクダ科動物に焦点をあてることで、形成期社会の多様性と相互の影響、そしてそれによって生じた社会変容の実態に迫れることを期待します。

本シンポジウムではこの問いに応えるための様々な調査研究の成果を紹介します。考古学発掘によるラクダ科動物の確認、動物考古学調査によるラクダ科動物の動態調査、生物考古学研究による形成期ラクダ科動物の飼育状況の解明、また古代ゲノム分析によるリャマの遺伝学的情報の提供など、最新の調査成果を報告します。また現代のアンデスではほとんど見ることのできない高温・多湿環境での飼育の可能性について、日本の動物園の飼育実態とアンデス高地での民族学的調査成果との対比を行います。古代アンデスの幻の生業を描き出すことで、アンデス文明形成期（前3000年～紀元前後）に生じた社会変化をとらえることを目指します。

